
廃墟の恋物語：天を見よ編

渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃墟の恋物語：天を見よ編

【Nコード】

N4954BA

【作者名】

渚

【あらすじ】

廃カーというものを知っているだろうか？

高校生廃カーを主人公に、廃墟を舞台に繰り広げる恋模様！

……なのか？とりあえず、変な4人が暴走します

（前書き）

天文部に引き続いて渚です。今回はがらりと傾向を変え、だいぶぶつ飛んだ物語を書いてみました。ネジが3本くらい抜けているかもしれない、そんな感じ。青い月外伝の反省を活かして、くどい説明をだいぶ減らしてみました？

読んで楽しんでもらえれば幸いです。

廃カーというものを知っているだろうか？

カーがついてるからといって廃車ではない。ところで、廃車を廃カーと呼ぶと、なんとなく洒落た感じがする。その車はきっと高級なものだろう。おそらく外車。ベンツ。キャデラック。ただし、廃車。

って、そんなことはどうでもいい。

廃カー、それは廃墟探索者たちにのみ与えられる通称にして称号。荒廃し誰の姿もない遊園地、ずっと昔に閉鎖され時を止めたまま立ち続けるホテル、そんな廃墟を目指し求め愛する者を人は皆、廃力ーと呼ぶ。

そして、かくいうこの俺もまた、その一人。年齢はまだ15にして、数え切れない先達の後を追う男だ。高校生だからまだ近いところしか行けないが、いつかは全国を歩いて廃墟を旅しようと思っている。そのために今は出来ることから挑戦していくつもりだ。

というわけで、

「この俺、誠義は珠裳を廃墟に誘って告白しようと思う」

「ちょっと待てえ！」

俺の宣言からコンマ二秒の早さで男が手を挙げた。

「い、意味がわからねえ！ 何がどうしてそうなるんだ！ どこが挑戦なんだ？」

そう矢継ぎ早に突っ込みを入れてくる彼は俺の親友、勇樹。顔立ちがカッコいいが、髪の毛を金髪にしようとしたら色を間違えてオレンジになってしまい、それを直しているうちに緑っぽくなった。それ以来パイナポーと呼ばれている。

「何がどうしてそうなるか？ 理由はただ一つ、廃墟だからだ！」

「答えになってねーよ！」

「何を言う。俺にとって天地万物、この世にあるものは廃墟か廃墟でないかだ。お前がパイナポーであり、パイナップルでないのと同じことだ」

「何も違わねえよ！ お前の方がよっぽど違うだろ！」

パイナポーは畳みをダンダン叩きながらめきちらす。

そうはいつでも今俺たちがいるこの部屋だって廃墟と変わらない。絶妙な物の散らかり具合だから、この四畳半を秘密の会談の場に求めたんだぜ？ 俺の部屋だが。

「っていつかさあ、」

と、そこでもう一人手を挙げた奴がいた。そいつもまた俺の親友。髪を銀色、爪も銀色、ただし頬だけはしもやけのように赤い女、藍。そのあだ名を雪わらし。彼女は床に女の子座りしながら、

「廃墟がどうかじゃなくて、廃墟だからうまくいくかもしれないっていうことでしょ？」

「その通りだ、雪わらし。人、告白する際にも逢い引きする際にも自分の知り得意な場所へ連れていくと聞く！ よって、俺が告白する場所は廃墟だ！」

「うまくいかねーよ、それ！」

パイナポーのつぶやきを無視し、俺は部屋の壁に貼られた地図を指した。それは俺が今までこの街を冒険して探し出した廃墟マップ。いくつもの赤い点がそこにつけられている。

「場所はこの街のはずれの高台にある天文台だ。森によって半分隠れているが、建てられて40年経った今でも星は見える。夕方頃に彼女を連れていけばいいだろう」

「へえーロマンティック、みたいな？」

「よくねえよ。廃墟だよそれ。絶対来ねえよ彼女」

「甘いパイナポー」

俺は彼に振り返り「ふっ」と笑うと、学ランの内ポケットから一冊の本を取り出し投げた。それをうまくキャッチするパイナポー。

「『初心者でもわかる廃墟講座』……何だこれ」

「見てわかるとおりだ」

今まで廃墟に関する情報を集め、廃墟の歩き方まで含めたマナー講座。新聞の切り抜きをよせて集めたスクラップだが、我ながらよい出来だと思える自信がある。

「なんかカビくさ」

「黙れ」

雪わらしを黙らし、こほんと咳払いする。

「廃墟とは確かに古い匂い、滅びの思い出に満ち溢れている。そこに新しいものは何もない、それは認めよう。そして、廃力ーの集う聖地にこのような邪な感情を差しはさむことの批判も受けよう。どれをとっても俺が間違っている。廃力ーたるべきもの、そこで出会うのは同志か幽霊だけなのだから」

「いや、合ってるようで違うこと言ってるよなお前」

「だが、その主張をねじ曲げてでも俺は廃墟を告白する場所を選んだ。なぜなら、俺は廃墟と同じくらい彼女を愛しているからだ！」

そう言った途端、パイナポーが眼を丸くし、雪わらしは手で口元を押さえた。

「愛してしまっただ。珠裳の一体どこが気に入ったのか自分でもよくわからないが……気付いたら好きだったんだ。俺が言葉にしてはつきり言えることなんてそれくらいだ。ただ、この心が熱くなるというか苦しさを覚えるというか。いや、照れくさいな。それに、

」

俺は声を大にして叫んだ。

「廃墟に乙女はよく似合う！」

「……………は？」

部屋に沈黙が降りた。が、すぐに雪わらしが真剣な顔をして立ちあがり、俺に対して、

「なんていう純情。久しぶりにここえたわ」

「ありがとう、雪わらし」

差しのべられた手を握り、俺たちは固い握手をした。

ちなみに彼女はすごくいいと思うと凍えると言う。なんだかよくわからないが、痺れるって言いたいんだろう。

「いや、あの……………さ。想いはすつげえ伝わったけど」

一方、パイナポーは黄色と緑の変な色をした髪をかきながら、

「うん……………ま、いつか。なんか俺にはわからないわ、ごめん。と
りあえず応援だけするから。……………というか、」

そこで、彼も立ちあがり言った。

「その珠裳つてやつ、誰？」

「来たぞ、誠義」

秘密の会談から三日後、学校が終わった夕方の午後6時過ぎ。眩しいほど照り輝く夕陽を背に彼女はセーラー服姿のままやってきた。

「行く場所は天文台と言ったか。何を考えているか知らんが貴殿が我を星見に呼ぶとはなあ。まあ、よい。これも余興だ。では、行こう」

「あ、ああ」

珠裳、通称才女。その姿は日本刀の似合う黒髪の美少女というのがふさわしい。その長身に長い黒髪をたなびかせ颯爽と歩く姿は優雅にして風雅。切れ長の眼に宿る妖しい瞳はどのような男でも落とすと俺達の間では言われている。その姿はまるでかぐや姫。

だが、今まで俺のように勝負に出たものはいない。なんせ、彼女から「宇迦之御魂神と天照大神では、私は前者を選ぶが貴殿はどうか」と聞かれて間違ったことを答えると口を聞いてもらえないからだ。「うかの……は？」となるか意味がわからないかで、8割が脱落する。ちなみに俺は「キツネ」と答えて事なきを得た。

「貴殿……話がわかるな」

そう言って彼女が感心した時から、俺たちの友情は始まったと言えるだろう。

とにかく、そういう彼女が俺は好きなのだ。ある意味、廃墟よりも好きかもしれない。授業中に時々、「天を見よ！」と叫ぶ時も含めて全て彼女の魅力だ。

「と、とところで、才女は」

「ちよつと待て。なぜ貴殿はそうも震えているのだ。何か悪いものでも食ったか、それとも祟られたか？」

「いい、いや。そそんなことはない」

首を傾げる才女から眼を背き、俺は全身で深呼吸をした。まずい、心臓がバクバク言っている。いつもは彼女を前にしても平気なのに、告白するとなったらこれだ。この切迫感に打ち捨てられた地下鉄駅構内を冒険して出られなくなった時のに匹敵する。

「具合が悪いなら無理をする必要はない。そこで休むがいい」

「いいいいや、俺が休んでいたら目的地に着く前に真っ暗だ。明るいうちに、」

「問題ない。私は私でさっさと行ける」

「……は？」

言われて振り向くと才女は俺そっちのけでつかつかと廃墟への道を歩いてしまっていた。夕陽がその凜とした背を赤く染める。だが、見とれている場合じゃない。思わず声をかけようすると彼女が振りむいた。

「そもそも星空なら、貴殿のいる場所でも拝めるからな。では、また会おう」

最後にふっと笑みを漏らして、才女は去って行った。

そして、俺は一人取り残される。何も考えないままベルトにつけたトランシーバーを取り出し、スイッチを押すと、

「パイナポーー!!」

そう絶叫した。

『うつせーな! はい、こちらパイナポーだよ。なんだー? 才女は来なかったのか?』

「違う! 振られた!」

『展開早すぎだろーが! 一体どういうことだ!?』

すぐに事情を説明する。何かあった時のためにパイナポーと雪わらしを廃墟周辺に待機させておいたが、まさか廃墟に行く前に連絡するとは思わなかった。

彼は電話の奥でため息をつくと、

『まー確かに、廃墟に誘って来る女だからな。裏があるんじゃないかねえかって思ったよ』

「どーすればいい! 俺は、俺はもうダメだ! 廃墟に帰る!」

『帰るな! つつか行け! 才女を追って行け!』

「無理だ! 彼女は俺に興味なんてない。告白しても振られるだ

けだ！」

『くっ……それはそうだが……って、うん？ 待て。今、雪わらしに代わる』

すると、すぐに声が代わった。何か嚙んでるくっちゃくっちゃした声で、

『もしもし藍だけどー』

「お、お前のんきにガムなんか食ってるなよ！」

『まあまあ。ところで、タマモのことだけど、まさか告白して付き合えるとマジで思ってた？』

「どういうことだ？」

ああ、そんな話をしている間に日が暮れる！

『タマモはそう簡単に人間の男に転ばないってこと。あれを転ばせるなら、うかのみ……なんちゃらにならないくらいしないと無理だって。いつも天を見ろって言ってるじゃん』

「まさか、あれにはそんな意味が！？」

知らなかった。私の夫となるべき人間は神となれ、なんて意味だったとは！

すげえ、才女！　ますます惚れた！

「で、神になるにはどうすればいい？」

『それはタマモに聞けば？』

『そうだぜ！　まずは外堀からだ！』

再び、電話の主が切り替わり、パイナポーが声を挟んだ。

『せっかくの機会だ！　二人で星を見ながら神でも話してやりやあ、仲も深まるってもんだ！』

「そ、そうか……！」

俺は丘の上にある天文台を見上げた。告白するにしても別に今じゃなくていい。それに、これは逢い引き、デートなんだ！　才女と二人きりのまたとない機会なんだ！

『こうなったらやれるとこまで行つてこい！』

『タマモをとことんこえさせてしまいな！』

「ありがとう、二人とも！　俺は行くぜ！　あ、それとガムは廃墟の中には捨てるなよ！」

通信を切り、俺は駆けだした。

待っている、才女！　俺はお前にふさわしい男になってやるぜ！

「おや、来たのか」

天文台の最上階、巨大な望遠鏡に寄りかかりながら才女はいた。夕暮れは過ぎ、薄暗い室内に一人で退屈そうにしている。彼女は紫色の扇子を仰ぎながら、ちらりと俺を見やると、

「体はいいのか？」

「ああ、大丈夫だ」

螺旋階段を走って駆けあがってきたせいで息は切れているが、落ちついている。さっきよりはずっといい。

才女は「そうか」とつぶやくと、空を見上げた。

「ところで、誠義。この望遠鏡は壊れているな」

「ああ。廃墟だからな」

ここはもともと開閉式ドーム状の屋根で、開いたところから望遠鏡をのぞかせて星を見る場所だった。もうずいぶん昔にそれは壊れてしまっているものの、屋根のガラスはほとんど落ちているから星空は見ることができる。

「のぞいて見ることができないのは残念だ。これにて月を見れば稲羽之素菟も見ることができたのかもしれないが。まあ、よい。我は兎に興味などない。我には狐がいればよい」

「そうかそうか」

改めて周囲を見回す。壊れた椅子に歪んだ鉄の棒、割れた窓から

頭をのぞかせる木の枝。最後に、床に散らばるガラス片。廃れと滅び以外に言いようのない景色はかつての面影を不思議なノスタルジアとともに偲ばせる。寂しさが儚さに染まる。

そして、その中心に空から降り注ぐ青色の光りに照らされた彼女がいる。

長い黒髪を垂らし、滑らかな肢体をのぞかせながら。

「才女。お前に話があるんだ」

「奇遇だな。我も貴殿に話がある」

「ほ、ほんとか!」

思わず、声が上がると。才女は見上げていた空から視線を降ろすと、

「貴殿……ここは天文台と我に言ったな」

「ああ、そうとも!」

「では、天文台とはかくもこのように滅びに満ちた場所であつたろうか?」

「ああ! ……うん?」

一瞬、その声に嫌な予感がした。待て、なんだこのざらりとした感覚は。俺は何かしたか?

「だが、先ほど貴様はここを廃墟だと言った」

才女が扇子を閉じ、ゆつくりと望遠鏡から離れる。そして、俺を正面から見ると普段よりいっそう妖しい笑みを浮かべ、

「よもや我をこのような廃れた場所へ連れてくるとはなあ、誠義。ここが天の岩屋というなら話は別だが、そうか、貴様にとつてこれが天文台か。東洋人は謙遜を美德と言うが、それもここまでくれば目出度きものであるな」

「ちょ、ちよつと待て。才女。お前はここが廃墟だと知って来たんじゃない、」

「知るか、馬鹿者」

言った瞬間、才女は笑顔を打ち消した。玲瓏たる視線を俺に突き刺し、セーラー服のどこから細長い棒を取り出す。月光に照らされるそれは緩やかな曲線を描いた漆色。懐刀だ！

「ま、待て！ 廃墟と言つてなかった俺が悪かった！ 言い忘れていたんだ！」

「ならば、貴様は最初から廃墟と知った上で我を連れてこようとしたわけか」

氷のような能面が一步近づぐごとに凄みを増す。

鞘が引き抜かれ、月光に照らされる銀色の刃。

やばい、殺される。幽霊は同志であつて、俺はまだそれになりたくない。

「落ちつけ才女！ ここには藍と勇樹もいる！ 友はお前だけじゃない！」

「愛と勇気だけが友達だ？ 何を言っているのだ、貴様は」

一瞬、呆けた顔をした後、才女は何も言う暇もなく俺の前へと踏み込んだ。

すぐさまランシーバーに手を回す。だが、間にあわない！

才女はまっすぐ短刀を振りかざし、

「てい」

刀を持っていない手でデコピンされた。

「がはっ……」

だが、痛い。頭の中にまで響く痛みに、俺はその場に尻もちをついた。

「やれやれ、冗談だ」

才女は短刀を収めて、ふっとため息をついた。

「しかし、本当に廃墟に連れてくるつもりだったとは。貴殿の心を理解するには、我はまだ浅いようだ。だが、許す。天を見よ、誠義」

「て、て……てん？」

言われるとおり見上げれば、満天の星空が割れた屋根の上に広がっていた。きらきらと輝いて、それはとても美しい。

って、そんなことはともかく最初に許してほしかったんだが。

「まあ……、いいさ。俺はお前と星を見れて光栄だ」

ジンジン痛む額を押さえて座り直すと、才女も俺の横へと座った。再び、扇子を取り出すやいなや、じとりとした視線で、

「褒めても何も出んぞ。ところで、先に言っていた貴殿の話は何なのだ？」

「ああ、稲荷寿司を持ってきたことだ」

「馬鹿者。それを先に言え」

途端にそわそわし始めた才女に、リュックから出したそれを献上する。ぱくりと頬張る彼女を見ながら、俺はふっと和んだ。

まあ、告白は今度でもいいか。

今は……才女がいる今はこれはこれで幸せだ。死にかけるのも廃墟探索者ならよくあることだ。なぜなら、俺達は焚火の明かりにつられ集う。廃墟になった病院の手術室で風化したかつての玉座の間で、あるいは忘れられた地下商店街でぼつりぼつりと会話を交わす。人に会う事は稀で、常にリュックと懐中電灯を持ち、時折幽霊を友とする。

それが廃力！。失われた輝きを求める者。ノスタルジアを心に満たす者。

「なあ、今度神社の廃墟に行かないか？」

「断る。それより稲荷をもっと出せ」

「もうねえよ！」

しかし、人にはあまり理解されない。

それもまた廃力！。寂しくも温かいロマンスを求める者。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4954ba/>

廃墟の恋物語：天を見よ編

2012年1月13日21時06分発行